

書評

Daniel Kelly

Yuck!: The nature and moral significance of disgust (The MIT Press, 2011)

タイトルが示している通り、本書は嫌悪 (disgust) を様々な観点から考察して、その本性や道徳との関わりを論じたものである。基本的には自然主義的な心の哲学をベースにし、まずは嫌悪を構成するさまざまな認知構造を明らかにした上で (第 1 章)、進化的な観点から嫌悪の様々な側面を考察する (第 2~3 章)。ここで筆者は、entanglement thesis (ET) と呼ばれる立場を採用し、われわれが持っている嫌悪は独立した二つの進化的起源を持ち、それらが結びついて現在のわれわれがもつ嫌悪が構成されていると主張する。さらに、その嫌悪は文化と遺伝子の進化的フィードバックの中で新しい機能を獲得していく。これを筆者は co-opt thesis (COT) と呼んでおり、その機能の一つが道徳との結びつきである (第 4~5 章)。全体を通じて記述や議論は明快かつおおむね説得力があり、嫌悪のみならず感情全般の進化や、進化と倫理の関係に関心のある心理学者、生物学者、そして哲学者に是非ともおすすめしたい内容になっている。

構成は以下の通りである。Ch. 1 Toward a functional theory of disgust, Ch. 2 Poisons and parasites: The entanglement thesis and the evolution of disgust, Ch. 3 Disgust's sentimental signaling system: Expression, recognition, and the transmission of cultural information, Ch. 4 Disgust and moral psychology: Tribal instincts and the co-opt thesis, Ch. 5 Disgust and normative ethics: The irrelevance of repugnance and dangers of moralization.

第 1 章では、嫌悪に関する (behavioral profile と呼ばれる) さまざまな事実に基づいて嫌悪の反応 (response) や誘因 (elicitor) が機能・行動レベルで考察され、その考察に基づいて嫌悪の認知構造モデルが提示される (p. 37 の図を参照)。まず、嫌悪の反応といっても実にさまざまなものがある。まずはアフェクト・プログラムと呼ばれるもので、何らかの誘因に対して自動的かつかなり早く生じ、そして持続する時間も短いような情動的反応である。たとえばわれわれが腐った食べ物を見た場合、いわゆる嫌悪感を抱いて即座にその食べ物と少し距離をおこうとするだろうし、口を大きく開けて眉をしかめた表情をしてしまうだろう (これは第 3 章で取り上げられる反応の一つだが、gape と呼ばれる表情である)。また、生理レベルでは体温が僅かに下

がるといった状態も観察できる。次が、中核的嫌悪 (core disgust) と呼ばれる反応である。たとえ食べ物でなくとも、汚れた服のように、それに嫌悪感を覚えた場合、われわれは吐き気をもよおすことがある。さらに、汚れた服を触ってしまった場合、手を洗いでしなければ不快な感覚が持続するだろうし、その服は他のきれいな対象を汚染するするものだと見なされるだろう (これら三つの反応は、それぞれ、口への取込み感 (oral incorporation)、不快感 (a sense of offensiveness)、汚染に対する敏感さ (contamination sensitivity) と呼ばれている)。最後に、これらの反応はわれわれの行動にさらなる影響を及ぼす。たとえば嫌悪を (引き起こさないものよりも) 引き起こすものの方が、われわれの記憶に残りやすいし他人に話す機会も多くなり、嫌悪を引き起こすものはそれだけで道徳的に悪だと見なされることさえあるのだ。

嫌悪を引き起こす誘因もさまざまなものが考えられる。政治的な立場や抽象的な思想から、腐った食べ物のように具体的なものまで、実にさまざまな対象がわれわれの嫌悪を引き起こす。さらに、個人や文化によっても嫌悪の対象は異なりうる。個人的には人ごみが最大の苦手な嫌悪の最たる対象であるが、そうでない人もたくさんいるだろう。このように実にさまざまなものが嫌悪の誘因になっているのは確かだが、他方でいくつかの誘因 (腐った食べ物や糞など) は文化を超えて普遍的なものであり、また生得的である可能性もある。

以上のような嫌悪に関する諸事実に基づき、嫌悪を引き起こす認知構造をモデルにしたものが p. 37 の図である。この図は 2 章以降のさらに具体的な議論を踏まえ、内容がさらに詳細なものへと改訂されていく (p. 59, 99, 136 の図を参照)。

第 2 章では嫌悪の進化が考察されている。この点に関しては、嫌悪がヒト特有の適応形質であるという説 (この立場では、嫌悪が自身に不利益をもたらす対象から身を守る機能を持っていると考えられる) や、他の動物にも十分観察でき、連続的なものであるという説がこれまでに提唱されてきている。筆者の立場はこのいずれでもなく、現在われわれが嫌悪と呼んでいるものは二つの独立な進化的起源をもち、それらが結びついたものであるという ET を提唱する。一つ目の起源は、毒をもった食べ物などを避けるための反応である。われわれは雑食性であり、進化の過程で実にさまざまな動植物を食べるようになってきているが、これはさまざまな食べ物を食べることができるという有利な側面がある一方、毒性のある食べ物に出会う確率も高くなってしまう。したがって、毒性のありそうな食べ物に対して敏感に反応するようなメカニズムを進化させる必要があった。それが、現在の嫌悪を構成する一つの要素であり、アフェクト・プログラムや口への取込み感のような反応に反映されている。もう一つの

起源が、病原菌や寄生生物を避けるための反応である。これも体に悪い食べ物と同様、われわれは病原菌や寄生生物を避ける必要がある。このような選択圧のもとで、ある種の対象には不快感を感じたり汚染に敏感になったりするように進化してきたというのが筆者の議論である。

ではこの両者はいかにして結びつき、同じ対象に関して同時に引き起こされるようになったのか (pp. 53-55)。まず、両者はそもそもある程度重なる部分がある。たとえば腐った食べ物はそもそも体に悪いうえ、病原菌などを持っている可能性もある。次に、ヒトの系統では肉食が加速していくが、肉は他の食べ物に比べて病原菌を持っている可能性が高く、また腐る可能性も高い。それゆえ、両者の結び付きが加速していったと筆者は述べる。さらに、最後の要因としては、嫌悪に見られるいくつかの反応が、同種個体にある種の情報を伝えるという機能（これは次章で論じられる）を獲得したことが重要であったという。

しかし、本章では嫌悪の進化をテーマにしているにも関わらず、比較的な視点からの考察はほとんどなされていない。二つの独立した起源はかなり古くにさかのぼれるものであり、他の種にも相同形質が見つけられると筆者も述べているのだが (p. 45)、なぜかこの章では他の動物に関する議論がほとんど見られないし、見られたとしてもその議論がどの研究に基づくものなのか、参考文献が明示されていない（たとえば p. 56 など）。だが、ある動物では上記のいずれか一種類しか反応が見られないというようなハッキリした証拠がなければ、進化に関する議論としては少し物足りないものになってしまう。

また、先のシナリオだけで嫌悪の進化がすべて説明できるわけではない。嫌悪の表出や認識というシグナリング・システムが説明課題として残されている (p. 68)。先にもふれたように、嫌悪感を感じた際、われわれは *gape* と呼ばれるような表情（第1章の紹介を参照）を見せ、さらには他人が嫌悪感を感じていることを認識することもできる。だが、一見すると、特に嫌悪の表出には進化上の利益が見当たらない。体に悪い食べ物や寄生生物を避けるだけなら、わざわざ嫌悪感を露わにする必要もないだろうし、むしろ、競争相手にはその毒性を気づかせずに食べさせて、死に追いやった方が自身の適応度は相対的に上昇するかもしれない。これを筆者は (Steven Pinker が指摘しているという理由から) *Pinker's puzzle* (p. 62) と呼び、第3章ではこの問題について、Steven Frank のコミットメント・モデルと文化伝達モデルの両者が比較されている（紙幅の都合もあり、両者の違いに関してここでは割愛させていただく。p. 95 の表で簡潔にまとめられているので、そちらを参照されたい）。

両者を比較した結果、筆者は文化伝達モデルを支持するのだが、このモデルにしたがえば、嫌悪におけるシグナリング・システムは仲間に情報を伝えるという機能を持っていると考えられる。たとえば病原菌や寄生物に関していうと、自分だけでなく他の仲間が感染してしまえば、それが翻って自身に感染する可能性もある。それゆえ、仲間にもその危険を知らせて自身の身を守る必要があるという (p. 92)。他方、毒をもった食べ物などに関する嫌悪の表出は、親が子に食べてはいけないものを伝えて包括適応度を上げるという議論が展開されているが、非血縁者に対する表出については何も論じられていない。筆者のシナリオにしたがうなら、現在のわれわれでは食べ物に関する嫌悪と病原菌などに関する嫌悪が結びついてしまっており、血縁者間で進化してきた反応が非血縁者間にも拡張されてしまっている、と考えられるかもしれない。ただ、この議論に関しても、比較的視点があればより説得力が増すはずである。たとえば、病原菌よりも毒にさらされる可能性が大きく、片方の嫌悪システムしか備えていない動物では、血縁者間でしか嫌悪のシグナリング・システムが見られないといった可能性が考えられるだろう。

第4章と第5章は嫌悪と道徳の関わりについてである。特に重要なのは筆者が COT と呼ぶ議論で、いかにして嫌悪と道徳が結びついたかを論じている。まず、筆者が依拠するのは文化と遺伝子の共進化モデルである。このモデルによれば、(特にヒトの系統においては) 通常の生物進化によって遺伝的に獲得された認知システムが文化を生み出し、さらにその文化が新しい選択環境を生み出し、新たな遺伝形質の獲得を促進する、というフィードバック・ループが形成されている (p. 106 の図を参照)。嫌悪もまた、このフィードバック・ループの中で道徳 (もしくはわれわれが道徳と見なしているもの) との結びつきを獲得してきた、というのが筆者の主張である。たとえば、われわれは異なる民族と自分の民族の区別に敏感であるような心理メカニズムを進化させてきた。このような民族意識と嫌悪というもともとは別々に進化してきたものが結びつき、異民族であることを示すような規範や行動という誘因によって嫌悪が生じ (この嫌悪された行動／規範が、道徳的規範につながる)、結果的に相互作用を避けるという反応が新たに進化してきたという。また、第5章では筆者の ET や COT を踏まえながら、嫌悪に関する異なった事実認識から出発した規範理論 (Leon Kass や Martha Nussbaum によるもの) を批判する議論が展開されている。

以上、特に比較的視点に基づく議論や証拠が限定的で、嫌悪の進化に関する議論は一部説得力に欠けるとはいえ、さまざまな議論が手際よくまとめられており、また筆者自身の主張もきわめて興味深いものである。嫌悪や感情全般、あるいは心の進化を

考察する際、必須の参照文献になりうる研究であると言えるだろう。なお、草稿段階で大西勇喜謙（京都大学）、菅原裕輝、太田陽（以上名古屋大学）の各氏から有益なコメントを頂いた。感謝したい。

（中尾央，日本学術振興会特別研究員・名古屋大学大学院情報科学研究科
hisashinakao@gmail.com）

